

玉陵碑

玉陵碑は、1501 年に王家の陵墓である玉陵が完成したときに建てられた石碑です。この石碑は今でも東の墓室前の中庭に立っています。石碑は輝緑岩で作られており、もとはわずかに緑がかった色合いをしていましたが、風雨に晒され現在では濃い灰色になり苔に覆われています。碑文は、琉球王府の方言と正式な日本語の文言の両方を書き表すことができる日本語の平仮名で記されており、尚真王と陵墓の建設に関わった息子・娘 8 人の名前が並べられています。また、碑文には玉陵に埋葬することが許される対象についての規則も野江 b られており、その内容には規則を破れば祟るとも書かれています。注目すべき特徴は、石碑の上部にある象徴的な彫刻画で、縁起が良いとされる一對の鳳凰と太陽、雲の意匠が刻まれています。

当時の琉球王府の伝統では、太陽は王を象徴し、平和で繁栄した統治時代に現れるとされていた鳳凰は最高位の神女である聞得大神を象徴していました。これは中国の皇室の伝統と結びついています。中国では、太陽から生まれ、宇宙を象徴する鳳凰は、皇帝の正義、従順、忠誠を表しました。中国と日本の美術では、一對の鳳凰が描かれる時は、尾羽の形状が異なる雄と雌が描かれていました。雌雄一對の鳳凰は、宇宙の陰と陽を象徴します。玉陵碑の鳳凰たちはそのような異なる特徴を持っておらず、このモチーフに対する琉球独自の解釈であるように見受けられます。